



ポストコロナ時代の人類の生き方 8

宇宙から地球を観て考えること

宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

「宇宙生命哲学」の大切な決まり事は、常に宇宙から地球を観る感覚で物事を考えることである。人類史上、実際に宇宙から丸ごとの地球を観た人は、米国・アポロ計画の月面着陸に関わった12名の宇宙飛行士だけである。1969年7月20日、アームストロング船長が月面に、人類の第一歩の靴跡を残した瞬間の映像を今も鮮明に覚えている。あれから55年、新たな人類の月面着陸計画（アルテミス計画）が、装いも新たに始まっている。日本の月着陸船「SLIM」の成功もその一歩である。

宇宙へ行ける人は、ほんの一握りの人たちである。そこで、宇宙に行かなくても、地球上で宇宙を疑似体験できる装置を作ってみた。講演会場にその装置を持ち込んで、100余りの聴衆と、漆黒の闇に浮かぶ地球と月を宇宙の彼方から眺める感覚を共有した。

「宇宙」から地球と月を見る疑似体験の試み

ヒマラヤ山脈や南極大陸など、訪れるのが困難であった地域が、装備や技術の進歩で、かなり手軽な観光地へと変貌した。今や、宇宙が次世代の有望な観光地になろうとしている。月旅行もその1つで、アメリカ航空宇宙局（NASA）が主導し、NASAが契約している米国の民間宇宙飛行会社、欧州宇宙機関（ESA）、日本の宇宙研究開発機構（JAXA）、カナダ宇宙庁（CSA）、オーストラリア宇宙庁（ASA）などの国際パートナーによって実施さ

れるアルテミス計画の有人月面着陸ミッションが2026年に予定されている。

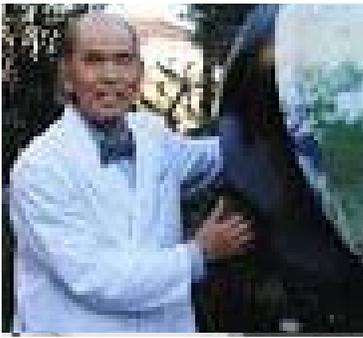
何を目的に月へ行くのだろうか？ 月から見える景色は、地球と太陽と満天の星である。その中で、人々にひととき大きな感動を与えてくれるのは、我々が棲む母なる地球である。人類を含めて、すべての生命を育んできた生命の星を、宇宙空間から自分の目で観る感動は、想像に難くない。人類の究極の望みの一つは、宇宙から、漆黒の闇に浮かぶ地球の生の姿を見ることにある。

そこで、地球上でこれを模擬体験する装置を作ってみた。天井と床と壁を暗幕で覆い、真っ暗にした部屋の天井から蛍光塗料で青く塗った直径10センチメートルの球（地球）を吊るし、その球から2.5メートル離れたところに、黄色く塗った直径2.5センチメートルの球（月）を吊り下げた（図は実験場の地球と月の模型）。LEDブラックライトで2つの球を照射し照明を消すと、漆黒の闇に、青く輝く地球と、黄色く輝く月が宇宙空間の位置関係を縮小した三次元の像として浮かび上がってきた。暗黒のじじまの中に佇むを孤独な生命の星を、遙かな宇宙から見ている感覚

である。

このシステムを講演会場に持ち込んで、聴衆の皆さんと「宇宙」を共有する企画を立てた。講演会場のステージ背面を黒幕にして照明を消し、会場全体を宇宙空間に見立て、青い地球とオレンジ色の月を、宇宙空間の位置関係を縮小した形で見せることにした。

一方で、現在のプラネタリウムの状況も把握しておく必要を感じた。折よく、相模原市立博物館のプラネタリウムで、春の新しい企画が予定されていることを知った。相模原市在住の女性邦楽グループ「あさきゆめみし」（尺八・金子



伊藤俊洋 (いとうとしひろ)

宇宙生命哲学者、1941年山梨県に生まれ、山梨大学卒、農学博士
北里大学副学長、日本油化学会会長、極限環境生物学会副会長、
山梨科学アカデミー副会長、日本・中国友好写真家協会会長などを歴任
専門：宇宙生命哲学、極限環境生物学、アストロバイオロジー
活動拠点：サイエンスカフェ・コスモス (宇宙生命哲学研究所)
252-0329 相模原市南区北里 2-23-8, E-mail:itoht1201@gmail.com



宇宙空間で太陽光を受ける地球と月の模型

朋沐枝、箏・坪井智子、十七絃・設楽聡子)による”春宵ほしぞらコンサート”である。会場は満席で、満天の星空を背景に、桜吹雪の中を、桜づくしの春の楽曲がライブの臨場感を伴って流れた。春の星座の解説コーナーもあった。私が最も注目していた地球と月は、予想通り、圧倒的な存在感で映し出され、それが観客に向かって覆いかぶさるように迫ってきて、映像技術と

しては完璧な演出であった。しかし、それは、私が見たかった映像とはかけ離れており、講演会場では一味違った宇宙空間を作れるとという自信が湧いてきた。講演の最後には、「生命の循環」を思い起こさせる楽曲「千の風になって」を歌うことを予定していた。金子朋沐枝さんのCDに「千の風になって」があったので、急遽、5日後の講演会で、尺八で伴奏して



金子朋沐枝さんの尺八伴奏で歌の練習をしている筆者

戴きたいとお願いし、快諾を頂いた。講演会の本番では、「宇宙」の疑似体験が思いのほか好評であった。今回は、物音ひとつしない漆黒の闇の中で、はるかに青く輝く地球を眺めながら瞑想する時間を、もう少し長めに取りたいと思った。宇宙科学の研究は別として、巨額な経費を使い、物見遊山で危険な宇宙に出かける時ではない。地球上で様々な模擬体験をすることにより、地球環境の愛おしさを認識し、地球環境の保全に集中すべき時である。38億年という長い生命の歴史の中で、ひととき賢く進化したはずの人類が、今、国境を挟んで、血で血を洗う

凄惨な戦争をしている。この惨劇を目の当たりにして、我々は、なす術もなく立ちすくんでいる。宇宙から地球を見ると、人類が勝手に引いた国境などはどこにも見えない。人間以外の生物は、国境とは関係なく、自由に地上や海の中を移動しながら、生物本来の「生」を享受している。戦争の指導者たちは、宇宙空間の模擬体験をすることで、自分達の所業の愚かさ気がついてくれるだろうか。この演示実験は、まだ生まれたばかりで、発展途上にある。多くの方からのご協力により、新しい文化、宇宙アトへと発展することを願うものである。